

---

## 1. 「函館型まちづくり公益信託」の確立をめざして（継続2年目）

函館からトラスト事務局  
(北海道函館市)

---

### I. 活動の目標

1993年に生まれた市民の自主的な資金による日本で最初の公益信託「函館色彩まちづくり基金」は、基金と地域、市民を結ぶカタリスト（触媒）として、独自の運営の仕組みである「函館からトラスト事務局」の役割が極めて大きいことを確認しつつある。「函館からトラスト事務局」は基金の運営事務やニュースの発行以外に、住環境ワークショップの展開、まちづくりウォッチドッグ（まちの動向の監視役）としての展開など、まちづくりテーマについて市民が活発に発言できる、函館の市民まちづくりの基盤強化の一拠点となりつつある。

今年度の活動は、基金運営事務局として、昨年のテーマを深化させるかたちで以下のテーマを設定した。

#### 1. 助成団体の活動をどのように支援し、活性化させうるか

助成団体の活動が十分な成果をあげられるように、事務局はどう支援していくか。

#### 2. 公益信託の函館型の創造的な運営体制とは

函館らしい公益信託の創造的な運営体制とは何か、そのなかでの事務局の役割はなにか。特に、低金利時代に想像力あふれた募金拡大の方策（指名基金としての企業による色彩町並み基金の試み）の追求など。

#### 3. 函館におけるまちづくり公益信託の定着化

函館においてまちづくり公益信託を地域のものとして市民に広く支援してもらえるよう、公益信託の地域定着化の方策を探る。

#### 4. 函館における市民まちづくりの試みの支援

「函館からトラスト事務局」を単なる基金の事務局としてだけではなく、まちづくりのNPOとして、重要なまちづくり問題について市民が活発、公平に議論ができる土俵を用意する、まちづくりウォッチドッグ（番犬：まちの動向の監視役）の試み。

### II. 活動の内容

#### 1995年度函館からトラスト事務局の主な活動（1995年4月～1996年6月）

公益信託函館色彩まちづくり基金の支援活動として、第2回基金助成4団体による中間報告会ならびに最終報告会を開催した。また第3回の助成活動募集の呼びかけを12月から1月にかけて行った。このような各団体との連絡や書類作成、諸雑務などを、基金受託者の住友信託銀行札幌支店に協力して行った。

また低金利による基金の利子収入の減少に加え、寄付が伸び悩み、次年度に充分な助成が行えない懸念があったため、基金運営委員会において対応策を検討すると共に、積極的な寄付募集を行った。その結果、半年間で約80万円の寄付を集めることができた。

ニュース「から」は、ほぼ季刊で年間4回発行した。内容は基金と助成団体の活動報告

を中心にしながらも、現在は基金と直接関連を持たないまちづくり団体などからの報告も掲載することで、編集内容に幅を持たせると同時に、さまざまな市民活動の紹介やネットワークにも努めた。

歴史的建造物の保全や街路整備といった直接的なまちづくりの誘発を試みると共に、文化面からのフォローも行い、基金設定3周年記念のチャリティコンサートや函館冬フェスティバルでのチャリティ茶会などを開催した。チャリティの収益は随時、基金に組み入れている。

1995年5月 1日 「から」第9号編集発行  
7月 1日 年次報告書「から」ANNUAL REPORT 94-94 編集発行  
9月 1日 「から」第10号編集発行  
9月 2日 公益信託函館色彩まちづくり基金第2回助成活動中間報告会開催  
公益信託函館色彩まちづくり基金第5回運営委員会参加  
12月1日 「から」第11号編集発行  
12月～1月 公益信託函館色彩まちづくり基金第3回助成活動募集  
1996年2月10～11日 函館冬フェスティバル協賛チャリティ茶会主催  
2月17日 公益信託函館色彩まちづくり基金第2回助成活動最終報告会開催  
公益信託函館色彩まちづくり基金第6回運営委員会参加  
2月～ 公益信託函館色彩まちづくり基金寄付募集  
6月 1日 「から」12号編集発行  
6月22日 公益信託函館色彩まちづくり基金設定3周年記念コンサート開催

## 1. 助成団体の活動をどのように支援し、活性化させうるか

### (1) 助成団体の選考と活動経過

★1995年2月27日、函館市内において公益信託函館色彩まちづくり基金の第4回運営委員会が催され、第2回目の助成となる1995年度の助成先と金額が検討された。

#### <第2回助成活動中間・最終報告会>

★1995年9月2日、土曜日、運営委員会に引き続き、海同会館において基金助成グループによる中間報告会が催された。

★今回の報告会会場となった海同会館は、石塚與喜雄氏が私財を投じて修復を行った建物であり、修復調査費として基金から助成が行われた。この修復に対しては奥平忠志運営委員から「自分にとっても子供の頃の思い出の場所で、壊れかけていた大切な建物をよく修復してくれたと思う。頭が下がる思いがする」など、地元を代表した感謝の言葉が寄せられた。

★また越野武運営委員からは、どの活動についても「少額でよくやっている。お金がもつとあるなら、運営委員は大いぱりで報告を聞けるのだが」など、ボランティアの熱意に対して惜しみない賞賛が贈られた。

★元町31番地に焦点を絞って住環境向上の課題を調査した元町グランドワークムーブメントは、調査の結果を1枚にまとめたカラーマップを披露。ワークショップを重ねる中で地域の実態が浮き彫りになりつつあることを報告し、「今後はより地域に密着し

た活動を展開する中で、地域住民のコミュニティ文化ムーブメントをつくりあげたい」と語った。

★昨年は4軒の下見板建築の塗り替えを行ったペンキ塗り替え支援札幌勝手連は、作業の途中においても試行錯誤しながら、より相応しい色彩を探求した過程を報告。今回は地元函館工業高校から5名の生徒の参加もあったことから、今後も地元の参加者の拡大をねらい、市民の中にペンキ塗り替えを定着させたい旨を語った。

★市電の保全活動と市電操車塔の保存運動を行った函館都電俱楽部は、市電の「こすり出し」を含めた車両のリフレッシュ作業の結果と、街路整備の中で操車塔の保存が実現した過程を報告。同俱楽部の広範な活動が、広く市民の理解を得つつある様子を語った。

## (2) 助成団体の活動をどのように活性化させうるか

中間・最終報告会終了後、運営委員も含めた参加者による懇親会が開かれたが、懇親会は助成団体と運営委員、函館からトラスト事務局との交流のみならず、助成団体相互の交流の場ともなり、市民まちづくり活動のネットワークが芽生えつつあることを感じさせた。

助成団体の活動をどのように活性化させうるかについては、中間報告会、最終報告会の発表の方式が定着し、事務局の支援スタイルも次第にノウハウが整ってきて、充実した成果を生み出していく函館からトラストなりのスタイルが整ってきたといえよう。

事務局運営との関連でまとめると以下の点があげられる。

★中間報告会、最終報告会は助成活動のスケジュールやまとめをうまいタイミングで誘導、刺激する材料となり、このスタイルは今後も定着していきそうである。

★報告会での運営委員などとの議論とその後の懇親会が活動グループが他の活動や人の相互交流となり、活動グループの刺激や活動方法を学習するチャンスになっている。

★事務局が発行するニュースペーパー「から」が助成活動の地域社会、全国への紹介に役立っている。

★基金がマスコミにとりあげられることも多く、助成活動が社会的に注目されるものであることもいい意味での刺激になっている。



### 第2回助成活動最終報告 THE SECOND ANNUAL REPORT 4団体が1年間いろいろがんばりました



ニュースペーパー「から」

## 2. 公益信託の函館型の創造的な運営体制とは

### (1) 基金の元本取り崩し問題

今年度の運営上一番のテーマは助成活動を行う財源確保の問題であった。

函館色彩まちづくり基金の規模は2000万円で小さく、とくに超低金利時代の現在は、実質運用益ゼロの状況が続いている。基金の効率的な運用をテーマに運営委員会と事務局で具体的方策を検討する討議を重ねてきた。公益信託の運用の柔軟性や自由をうまく活用して、元本の一部を低金利時代は取り崩し（ペイアウト）を行い、助成規模を拡大して、活動成果をあげる。その成果をもとに好況時に市民や企業からの寄付拡大を募り、基金をもう一度拡大（ペイン）していくなどの方策を論議した。

1995年9月の運営委員会での議論では「PRのためにも積極的に助成を拡大すべきだ」「民間基金ならではのフットワークの軽さで柔軟に対応したい」「活動あっての基金だから、今は充分に活動助成できるようにした方がいい」など、提案を支持する意見が相次いだが、一方で「先の見通しもないのに、目先の活動にとらわれるのはどうか。きちんと寄付の予算を立てて寄付集めを行うべきだ」という反対意見もだされ、1996年2月の運営委員会での議論では結局経費の見直しや広報宣伝などの意見も出されたが、寄付の拡大に務めることで、基本的には基金を取り崩さず、寄付の状況を見ることが確認された。

公益信託の特質の一つとして基金の弾力的運営と元本取り崩し方式が可能であるという側面があるが、実際上の運営ではこれを実行することがなかなか難しいことが結果確認されたといえよう。元本取り崩し方式の意義は理解されるものの、実行するとなると越えるべきハードルはなお高いという印象であった。

### (2) 結果としての96年の寄付の拡大

元本取り崩し方式の議論の過程で、助成財源拡大が緊急の課題であることが運営委員会と事務局の共通認識となった。この危機感を背景に96年は寄付金集めが活発化し、6月現在80万円を超える寄付が集まっている。特に函館での寄付の拡大が急激であり、3年目にはいり、基金が地域に定着してきたともいえよう。その中にはチャリティコンサート、チャリティ茶話会などのイベント的な基金拡大の活動（Fund Raising）も昨年からトラスト事務局を中心に始まり、草の根から市民に浸透していく方法が引き続き行われている。一方全国的規模での企業への寄付要請はスタート時からの課題ではあるが、今年度も十分な働きかけを行うところまではいかなかった。

### (3) 運営委員の交代

9月2日函元町の五島軒において、公益信託色彩まちづくり基金の運営委員会が開催され、基金発足以来、運営委員長をお願いしていた足達富士夫氏が北海道大学を退官されて道外に移られ、また函館市都市建設部長の藤沢重人氏が市役所内の異動により、それぞれ運営委員を退かれ、代わって北海道大学建築工学科教授の越野武氏と函館市都市建設部長の金子隆敏氏が、新たに就任となった。運営委員長は当日、委員の互選により建築家の山内一男氏に決定、副委員長は委員長からの指名により越野武氏に決まった。

今回の運営委員会は欠員の補充という面での運営委員の交代であった。今後運営委員の任期等も、運営委員会の議題として議論していくべき問題となろう。

#### (4) 函館と札幌の2事務局体制の役割

事務局の活動としては、基金拡大（ファンド・レイジング）が今後重要な仕事のひとつとなる。今まで寄付集めまでは十分手が回らないという状況であったが、今後は基金拡大専門の事務局スタッフも望まれる状況となっている。

函館からトラスト事務局は函館と札幌の2事務局体制で進んできたが、2事務局体制は良い面もあったが、コミュニケーションが円滑にいかないなどの問題も抱えていた。

この問題に関連して、寄付集めの動きを軸に函館事務局は寄付等の地域への働きかけと助成団体への日常的接触、札幌事務局はニュースの発行を中心に基金の全国への情報発信を行うという分業体制が、ようやく見えてきたといえるかもしれない。

また函館の事務局活動に若い新しいメンバーが参加しつつあるのも活動が3年目に入つて、次第に地域に定着しつつある成果といえよう。

### 3. 函館におけるまちづくり公益信託の定着化と今後

#### (1) 函館におけるまちづくり公益信託の定着化

3年目にはいり、基金が地域に定着してきたといえる現象を列記すると、

★運営委員長に函館在住の市民が選ばれる。

★基金財源の危機感を背景に96年は寄付金集めが函館で活発化し、市民各層からの寄付が拡大した。

★チャリティコンサート、チャリティ茶話会などのイベント的な基金拡大の定着。

★地域FMでの基金の紹介、映画祭、などの他の領域への拡がり。

また助成活動においても、地域に密着した作業や住民活動からの応募がふえてきつつある。

★ペンキ塗り替え支援活動への地元高校生の参加

助成活動の核となるペンキ塗り替え支援活動は、札幌勝手連を名乗るように北大建築工学科など札幌からのボランティアが12名と多いが、今年は函館工業高校で建築やインテリアを勉強中の高校生も5名参加して、楽しく実地の伝統的町並み保全作業を行った。地元の高校生を巻き込んだことで、地元での若いまちづくりの芽ばえが期待されるのである。

★MGMの住民参加で地域の住環境とともに考えていくワークショップ

★第3回助成への地域の様々な活動団体からの応募

地域の商店街振興組合や図書館のあり方を考える市民グループからの応募など、地域の様々な活動団体から「函館からトラスト」への助成支援が増えつつある。

こういった一連の動きは基金が3年を経過し、着実に地域に定着しつつある印であろう。今後はこの動き確実に受けとめ、地域で成果のあるまちづくりにつなげていく支援策を基金が用意していくか、財源問題も含め、しっかりととした体制の確立が求められる。

#### (2) まちづくり公益信託のこれからの展開

まちづくり公益信託のこれからの展開について、函館において1995年7月興味深いシンポジウムが開かれた。

#### 4. 函館における市民まちづくりの試みと展開

「函館からトラスト事務局」を単なる基金の事務局としてだけではなく、まちづくりのNPOとして、重要なまちづくり問題について市民が活発、公平に議論ができる土俵を用意する、まちづくりウォッチドッグ（番犬：まちの動向の監視役）の試みをおこなってきた。その背景には函館におけるここ20年来の市民が主導する地域のまちづくりという歴史がある。

##### （1）函館の市民まちづくり活動の系譜

★例えば、特別史跡五稜郭跡を舞台にまちの歴史を市民が演じる「市民創作函館野外劇」（1988～）、五稜郭跡のイルミネーションによる夜間演出「五稜星（ほし）の夢」（1989～）、市民総参加で夜景を豊かに輝かせようとする「函館・夜景の日」（1991～）と、まちをステージとして、市民が発案し自ら実践するイベントが相次いで誕生している。また元町俱楽部の色彩研究活動、まちづくり公益信託の設定、そしてじろじろ大学の展開なども企画・実践型の市民活動の一例といえ、公益信託による助成活動もそのすべてが企画・実践・提案型の市民活動である。

★これらの市民活動に共通しているのは、自らのまちを自ら再認識・再発見し、より豊かなまちをつくりうとしている点だが、それはいずれも、まちへの強い愛着と、まちづくりへの主体的な参画意識に裏打ちされている。そしてこれらの市民活動を通して、函館の市民は、手の届かなくなりつつあった自分達のまちを、徐々に手元に引き戻しつつあるようだ。

★このような市民活動は突然表れてきたわけではない。今以上に経済優先・行政主導でまちづくりが進められ、市民がまちづくりに直接的には関与できずにいた時に、函館山の自然環境と西部地区の歴史的環境というふたつの代表的な環境を保全しようとするところから函館における市民まちづくり活動は始まっている。函館山周遊道路建設問題を契機とする「南北海道支援保護協会」（1971～）の活動、旧北海道庁函館支庁庁舎の移転問題を契機とする「函館の歴史的風土を守る会」（1978～）の活動などだが、これら環境保全を軸として繰り広げられてきた先駆的活動がもたらした市民への意識啓発が、20年前後を経過した今、広範な市民まちづくり活動をもたらしているといえる。

★現在市民公募による「100人会議」からの意見もいかしながら策定作業が進められている「第4次函館圏総合計画」（1996～2005）においては、「協議」の文字が随所に登場し、「行政主導型からパートナーシップ型のまちづくりへの転換」、まちづくり活動への支援や調査・研究を行う組織としての「まちづくりセンターの設立」、さらに「函館色彩まちづくり基金などの民間基金による活動への支援と連携」などについてもうたわることが予定されている。

##### （2）市民まちづくり活動への展開

函館での市民の主体的な企画・実践・提案型の活動は実に多様である。現在も次から次に生まれてきている函館の市民まちづくりを基金の情報誌「から」の紙上などを通して紹介し、市民のまちづくり議論の活発化や全国への情報発信を行った。

###### ★じろじろ大学

地域のFM局いるかの番組「じろじろ大学」を通してまち、まちづくりの興味深い話題の情報発信をつづける村岡さんの試み。

### ★ウォーターフロント地区の新しいホテル建設構想

函館の景観上最も重要なウォーターフロント地区の新しいホテル建設に関して、オーナーのコメントと構想案を「から12号」に紹介して、今後この地区の開発と景観の問題への議論の場を設けた。

### ★函館の新しい映画館

函館の都市文化に欠かせない存在である映画館の新しい形式－函館市民映画館づくりへのコメント。

## III. まとめにかえて

函館のまちづくりは、確実に市民の手の届く位置に戻りつつある。それをしっかりと手におさめるには、個々の市民のまちへの表現としての活動がより豊かに芽ばえ、それらが自立し、相互のネットワークが形成されるまでに成長することが必要とされるが、その土壌はできつつあり、またそれを達成する柔軟な知恵と行動力が市民にあることも昨今の市民まちづくり活動は示している。

函館からトラストの試みは種がまかれ、熱心なボランティアの心に支えられ、ようやく小さな芽が地上に顔を出した。2000万円の基金というのは本当に小さな芽である。しかし小さな芽といえども、函館のまちを愛する市民に支えられるならば、その土壌に大きな花を咲かせることもまた可能となろう。

最後に小さな芽が地上に顔を出す過程で、函館からトラスト事務局の活動を財政面から支援していただいたハウジングアンドコミュニティ財団へ感謝したい。